

漁海況月報号外

平成15年1月1日～12月31日

静岡県水産試験場
(電話 054 627 4815)

静岡県水産試験場伊豆分場
(電話 0558 22 0835)

【黒潮流路】

図1に平成15年1～12月における月別の前半、後半の黒潮流軸を示した。

黒潮は、1～3月には遠州灘沖33°～34°Nを東へ流れ、三宅島と八丈島の間を通り房総沖を北東に流去した(N型)。4月上旬には伊豆諸島東側で大きく蛇行しD型となったが、下旬には再びN型になった。5月に遠州灘沖で蛇行しB型になった。B型は6月にC型に移行し7月上旬にはD型を経てN型となった。その後、12月までN型基調で、遠州灘沖33°～33°30'Nを東に流れ、三宅島付近を通過し、房総沖を北東に流去した。

【県下沿岸域】

図2に平成15年1～12月の沿岸水温の変化を旬別に示した。

県下沿岸水温は、おおむね1～3月は、平年に比べて高め、4月は平年並み、5～6月は平年並み～高め、7～8月は低め、9月以降12月まで平年並み～高めで経過した。

1～3月は、駿河湾、相模湾内に断続的な暖水波及が見られ、1月中旬には沼津で+2.4、2月中旬には雲見で+2.5など、沿岸水温は高めであった。暖水波及は相模湾奥の伊東には及ばず、伊東は平年よりも低めであった。4月上旬に黒潮はD型となり、房総沖からの冷水のため、沿岸水温は降温して平年並みから低め傾向になった。5月は、西から東進してきた蛇行が遠州灘沖に達して黒潮はB型となり、主として相模湾に暖水が波及し、稲取で5月下旬に+3.5、下田で+3.2など、高め傾向となった。しかし駿河湾への暖水波及は弱く、平年並みからやや高めにとどまった。6月は、黒潮が離岸し、沿岸域への新たな暖水波及は見られなかったが、沿岸水温は平年並みからやや高めで推移した。7月に黒潮がN型になり、断続的な暖水波及もあったが、冷夏の影響もあり8月まで沿岸水温は低めであった。9月以降も黒潮の接岸傾向が続き、断続的な暖水波及も見られ、沿岸水温は平年並～やや高めであった。12月上旬に比較的規模の大きな暖水波及が見られ、沼津で+2.6、焼津で+2.2など高め傾向となった。

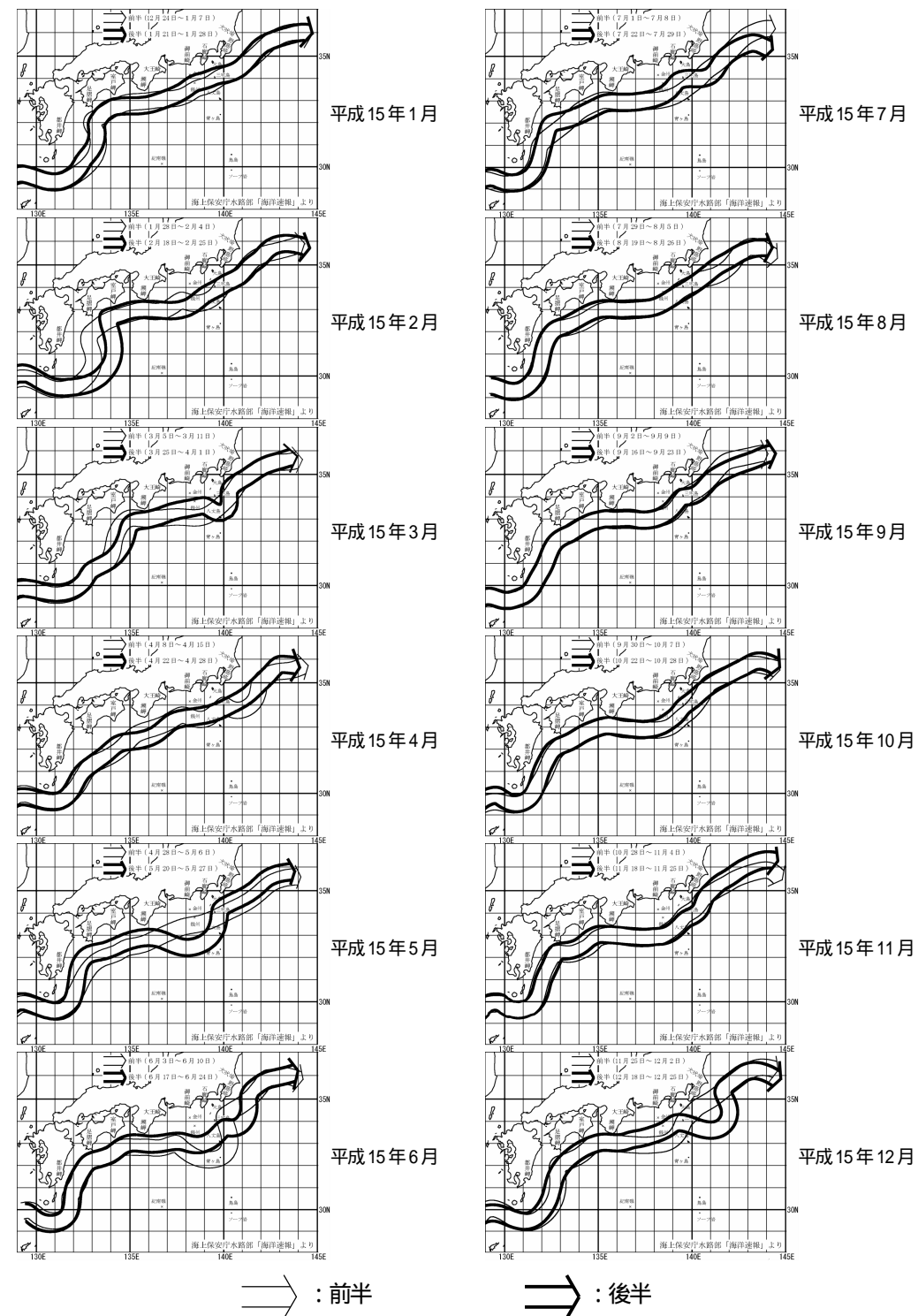


図1 黒潮流軸の変動(海上保安庁水路部「海洋速報」より)

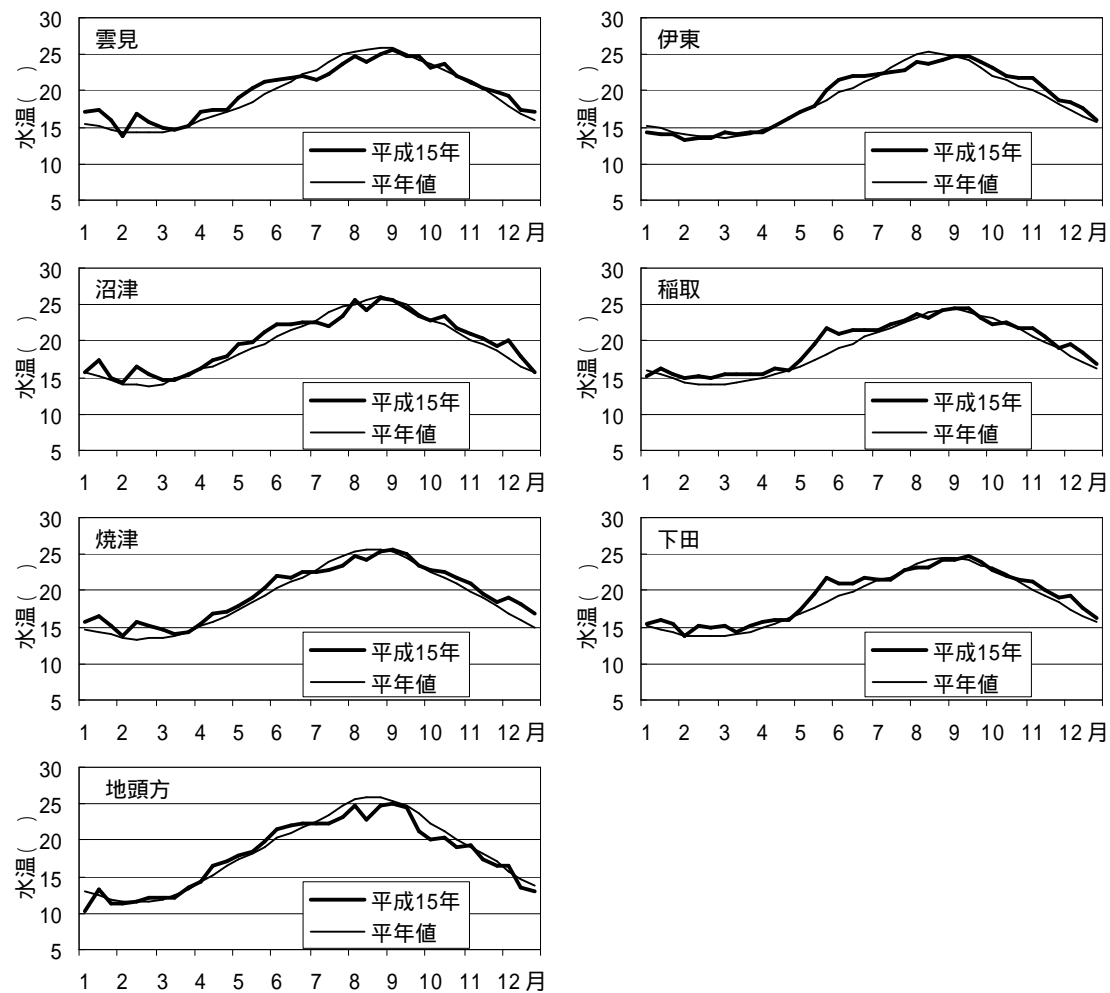


図2 平成15年1~12月旬別沿岸水温の変化

【サバたもすくい棒受網】

平成15年のたもすくい漁は、1月16日から大島(千波)周辺で、ゴマサバ対象の操業を開始した。2月は千波~利島沖で1隻当たり10トン以上のまとまった漁獲があり、マサバがゴマサバに混じってわずかに漁獲された。3~5月には銭洲近海~三本で漁場が形成されたが、漁況は低調に推移した。以降、6月29日の終漁まで、不安定ながらも千波沖を主漁場として操業が行われた。

その間に漁獲されたゴマサバの大きさは主に32~34cmで、5月以降には30cm以下の小型魚が多くなった。一方、マサバの大きさは36~39cmが主体であった(図3)。1~6月の千葉、神奈川、静岡県船による水揚げ量は、マサバが42トン(前年0トン)、ゴマサバが5,024トン(前年6,024トン)であった。

静岡県船によるたもすくい漁と棒受け網は7月以降も行われ、7~8月には三宅島近海および銭洲で26~29cmの大きさのゴマサバが主に漁獲された。9~11月も引き続き、銭洲が主漁場となり、尾叉長32cm以下の2003年級群が主に漁獲され、1隻当りの漁獲量も昨年同期と比べ約2~3倍の15~25ト

ンと好漁となった。12月には三宅近海が漁場となり、尾叉長32cm以下のものに加え、33~36cmの大きさのものも漁獲された。

7~12月の棒受けによるサバ類の漁獲量はマサバ0トン、ゴマサバ6,824トンで昨年同期の0トン、3,723トンと比べるとゴマサバで約2倍となった。

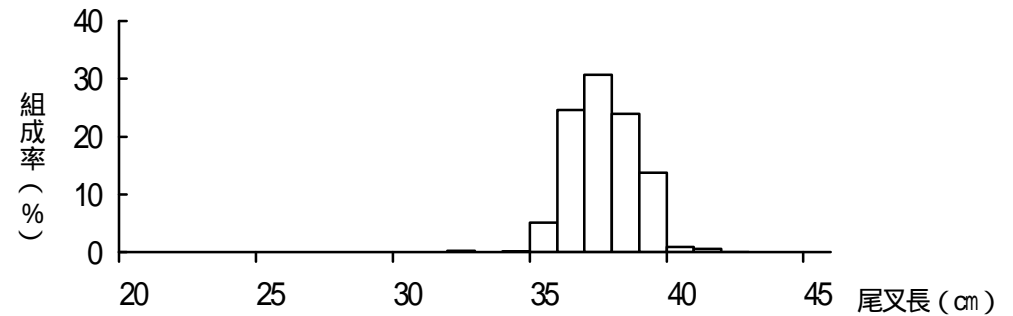


図3 平成15年1~6月のたもすくいによるマサバの尾叉長組成

【竿釣近海カツオ】

・水揚量と魚価

平成15年の静岡県主要5港(沼津、清水、焼津、小川、御前崎)における近海竿釣り水揚量は、6,854トンで過去5か年平均の1.5倍であった。これは、2~4月に小笠原諸島からその西側の海域で大型カツオ、5月に熊野灘から常磐沖の黒潮沿いで小型カツオの好漁場が形成され、その漁獲物が県内に水揚げされたためである。この2~5月の4か月間で年間漁獲量の85%を漁獲した。6月以降は、主漁場が常磐、三陸沖に移動したため県内の水揚量は大きく減少した。

魚価は、240円/kgで過去5か年平均(363円/kg)の66%であり、前年の395円/kgを大きく下回った。年間平均の1隻1水揚げ当りカツオ水揚げ金額は254万円となり前年(334万円/1隻1水揚げ)、過去5か年平均(296万円/1隻1水揚げ)を下回った。

・漁況(漁場形成と魚体)

御前崎市場での調査(月に3回程度実施)及びQRYによれば、静岡県船の漁況はおおむね下記のとおり推移した。なお、6月以降は、ほとんどの県内船は東北海道に出漁した。

- 1~2月：小笠原諸島周辺からその西側の海域で、特大、特特大、大、中カツオを漁獲した。
- 3月：小笠原諸島周辺で、特大、特特大、大、中、小カツオを漁獲した。
- 4月：小笠原諸島周辺で、特大・特特大(体長67cmモード)、大・中(体長58cmモード)、小カツオを漁獲した。下旬には、伊豆諸島周辺で極小・小(体長46cmモード)、チンカツオも漁獲した。
- 5月：熊野灘から伊豆諸島周辺で小・極小(体長45cmモード)、中、大カツオを漁獲した。
- 6月：常磐沖で、小、極小カツオを漁獲した。伊豆諸島域では沿岸竿釣り船が極小・小(体長42cmモード)カツオを漁獲した。
- 7月：常磐~三陸沖で、小、中、極小、大カツオを漁獲した。伊豆諸島域では沿岸竿釣り船が小(体長44cmモード)、極小、中、大カツオを漁獲した。
- 8月：三陸沖で、小、中、極小、大カツオを漁獲した。伊豆諸島域では沿岸竿釣り船が小(体長46cmモード)、極小、大、中、特大カツオを漁獲した。
- 9月：三陸沖で、小、中、極小、大カツオを漁獲した。伊豆諸島域では沿岸竿釣り船が小(体

長46cmモード) 極小、大(体長61cmモード) 中、特大(体長71cmモード)カツオを漁獲した。

10 月：三陸沖で、中、小、大、極小カツオを漁獲した。伊豆諸島域では沿岸竿釣り船が中(体長52cmモード) 大(体長62cmモード) 極小(体長37cmモード) 特大カツオを漁獲した。

11 月：常磐～三陸沖で、中、小、大カツオを漁獲し、平成15年漁期はほぼ終了した。

表1 平成15年竿釣近海カツオ水揚量等 (県内主要5港)

年月	水揚量(トン)	水揚隻数	水揚/隻(トン)	平均単価(円/kg)	主漁場と魚体(銘柄)
15年1月	273	13	21.0	365	小笠原～西海域 特大、特特大、大、中
2月	1,338	42	16.8	185	小笠原～西海域 特大、特特大、大、中
3月	1,591	67	23.7	220	小笠原 特大、特特大、大、中、小
4月	1,469	101	14.5	256	小笠原 特大、特特大、大、中、小
5月	1,410	232	6.1	275	熊野灘～伊豆 小、極小、中、大
6月	431	110	3.9	250	常磐沖 小、極小
7月	149	41	3.6	156	常磐～三陸沖 小、中、極小、大
8月	70	19	3.7	187	三陸沖 小、中、極小、大
9月	43	14	3.1	290	三陸沖 小、中、極小、大
10月	35	13	2.8	349	三陸沖 中、小、大、極小
11月	28	15	1.9	380	常磐～三陸沖 中、小、大
12月	17	6	2.8	374	
15年計	6,854	673	10.2	240	
14年計	4,030	476	8.5	395	
5か年平均	4,556	558	8.2	363	

5か年平均：平成10～14年の平均

【まき網】

1 マイワシ

静浦漁港では7月だけで221トンの水揚げがあり、総水揚量の8割以上を占めた。本年の静浦漁港における総水揚量は264トンで、前年(27トン)の990%、平年(過去5か年平均：173トン)の152%と、近年としては好調であった。

小川港では7月に1,401トンと、同月としては記録的な水揚げがあり、1、8、10、11月も100トンを超える水揚げがあった。本年の小川港における総水揚量は2,494トンで、前年(639トン)の390%、平年(1,284トン)の194%と過去10年間で最も多い水揚げであった。

伊東港では9、12月に100トン以上、7、10月に18トンの水揚げがあったが、他の月は0～3トンの水揚げしかなかった。本年の伊東港における総水揚量は364トンで、前年(59トン)の618%、平年(2,761トン)の13%と、極めて低調だった前年を上回ったものの、低調であった。

2 カタクチイワシ

静浦漁港では5～7月に水揚げが集中し、1～3月と10、11月はほとんど水揚げがなかった。本年の静浦漁港における総水揚量は1,568トンで、前年(449トン)の349%、平年(1,605トン)の98%と、極めて低調だった前年を上回り、平年並みであった。

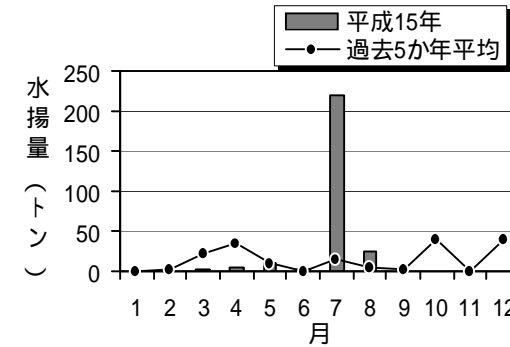


図4 静浦漁港マイワシ月別水揚量の推移

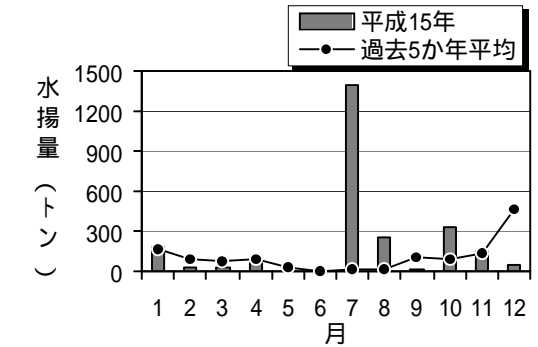


図5 小川港マイワシ月別水揚量の推移

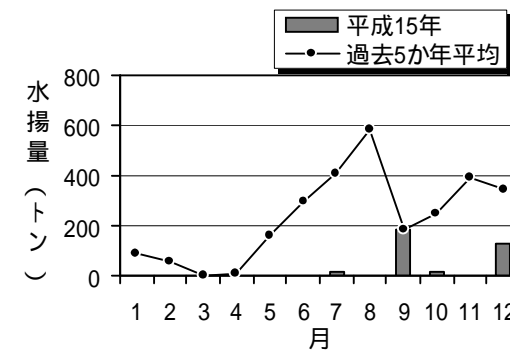


図6 伊東港マイワシ月別水揚量の推移

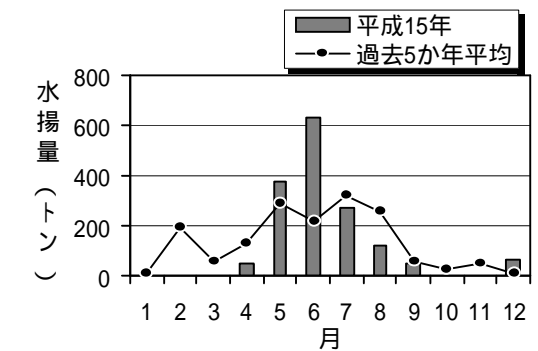


図7 静浦漁港カタクチ月別水揚量の推移

【シラス船曳網】

3～12月の主要6港(静岡・吉田・御前崎・福田・舞阪・新居)総水揚量は6,266トンと、前年の106%、平年(過去5か年平均)の87%であった。同じく総水揚金額は3,863,099千円で、前年の75%、平年の88%であった。また、平均単価は617円/kgと前年の70%、平年の102%と平年並みであった。

本年の漁況は、4月上～中旬に例年より早く好漁となったが、本来なら盛漁期になる5～6月に著しい不漁となり、特に駿河湾側での不漁が顕著であった。その後、7月後半に一時的に好漁となったが、8月には再び低調となった。9月後半から水揚げが回復し、例年なら水揚げが減少し始める10月以降も水揚げが維持され、10～11月は平年に比べ好漁となった。4、7、10～11月の好漁は静岡県沿岸への暖水波及を契機に始まった。一方、5～6月の不漁は黒潮が静岡県沿岸から離岸したため、長期間にわたり暖水波及がなかったことが要因の一つと思われる。

1日1か統当り水揚量をみると、7月上旬までは静岡と他の港ではその推移が異なっていた。静岡では3月下旬は220kgと解禁当初としては好調であったが、4月は100kg台、5月中～下旬は100kg以下となり、6月～7月上旬はほぼ0となり、記録的な不漁となった。他の港では3月下旬は100kg前後であったが、4月上旬には900～1,200kgの好漁となった。しかし、その後は減少し、5月下旬～6月中旬に福田・舞阪・新居で300kg前後と、一時的な増加がみられた以外は4月下旬～7月上旬まで70～230kgと低調に推移した。不漁から回復した7月中旬以降は全県でほぼ同じ推移となり、1日1か統当り水揚量は7月下旬に680kgまで増加したが、8月になって減少し、8月下旬～9月上旬は160～200kgと低調であった。9月中旬以降は回復し、11月上旬まで270～380kgと好調であった。11月中旬以降は減少し、12月には90kgとなった。

月別水揚量の推移をみると、3月は23トンと前年の598%、平年の25%であった。4月は989トンで前年の326%、平年の213%と好調であった。5月は375トン、6月は551トンで前年の36~40%、平年の34~45%と低調であった。7月は1,447トンで前年の138%、平年の100%と平年並みであった。8月は530トン、9月は867トンで前年の129~163%、平年の69~81%と低調であった。10月は917トン、11月は486トンで前年の135~151%、平年の123~229%と好調であった。12月は81トンと前年の64%、平年の91%であった。

月別平均単価をみると、前年が高めで推移したこともあり、12月以外の各月で前年同時期の41~93%と前年を下回った。平年と比較すると、3~4月は全国的に好漁だったため、平年同時期の56~79%と低めであったが、5~10、12月は95~144%と平年並み~高めであった。11月は好漁のため平年同時期の76%と低めであった。

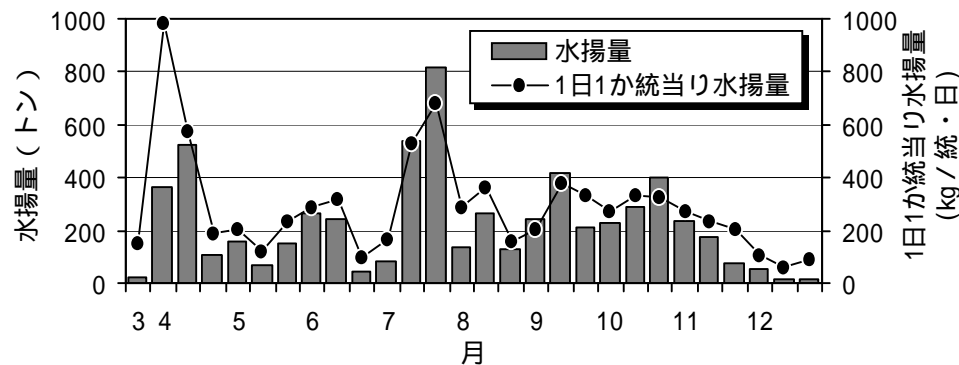


図8 平成15年主要6港旬別シラス水揚量及び1日1か統当り水揚量の推移

【定置網】

平成15年の伊豆半島東岸大型定置網8か統(伊豆山、古網、赤石、川奈、富戸、赤沢、北川、谷津)の漁獲量は4,453トンで、これは前年漁獲量3,548トンの1.3倍、平年漁獲量(昭和57年~平成14年平均)3,746トンの1.2倍であった。月別にみると、1~3月及び5~8月は平年並み又は平年以上で推移したが、4月及び9~12月は平年の45~70%程度と低調であった。漁獲量の最も多かったのは5月の722トンで、6月以降は毎月減少し、12月の漁獲量は5月の約2割の130トンとなった。魚種別漁獲量の上位10種は以下のとおりであった。

1. サバ類(さばっこを除く) : 1,281トン(前年の5.2倍、平年の1.7倍)
2. カタクチイワシ : 920トン(前年の1.7倍、平年の3.7倍)
3. マアジ(じんだを除く) : 781トン(前年の95%、平年の1.2倍)
4. マルソウダ : 499トン(前年の2.0倍、平年の2.8倍)
5. スルメイカ : 130トン(前年の46%、平年の90%)
6. シイラ : 93トン(前年の2.0倍、平年の1.8倍)
7. ウルメイワシ : 67トン(前年の50%、平年の1.3倍)
8. サンマ : 64トン(前年の51%、平年の52%)
9. イサキ : 53トン(前年の58%、平年の1.1倍)
10. サワラ : 42トン(前年の12.2倍、平年の2.9倍)

ブリについては、銘柄ぶりの漁獲量は31.6トン(4,533尾)で、卓越年級群であった2000年級群の漁獲が期待されたが、前年、平年を下回った。銘柄わらさの漁獲量は12.5トン(前年の11%、平

年の22%)と低調で、銘柄いなだは平年並(19.2トン)の漁獲であったが、2003年級群である銘柄わかしの漁獲量は5.9トン(平年の43%)と低調であった。

マアジは、1~6月まで1歳魚(尾叉長の中心17~22cm)主体に漁獲され、7月以降は当歳魚(2003年級群)が生長し、マアジ小(尾叉長の中心14~17cm)が漁獲の主体となった。1~4月の漁獲量は前年の30~90%と下回ったが、5月以降は前年の1.5~3.3倍と大きく上回った。マアジじんだは5~7月に漁獲されたが、前年を下回り、低調に推移した。

サバ類の漁獲は年間を通じて前年の1.2~19倍と大きく上回り、5~8月は毎月約200~300トンと好漁であった。漁獲の主体はゴマサバで、マサバは低水準の漁獲であった。2003年級群は5月からさばっことして入網し始め、8月以降は1歳魚(2002年級群)とあわせて漁獲の主体となった。

カタクチイワシの漁獲は1~3月に平年を上回る高水準であったが、4月以降は減少傾向で推移した。スルメイカは1~3月は前年、平年を上回る水準であったが、4月以降は低水準で推移した。

【サクラエビ船曳網】

平成15年の春漁は、3月26日夜~6月3日の夜にかけて操業が行われた。出漁日数は20日、漁獲量は1,443トンで、漁場は主に沼津沖~田子の浦沖に形成された(昨年の出漁日数は18日、漁獲量は1,305トン)。漁獲されたサクラエビの平均体長は38.4mmで、昨年(37.4mm)より大きかった。

秋漁は10月30日夜~12月23日夜にかけて操業が行われた。出漁日数は14日、漁獲量は470トン、漁場は主に焼津沖~大井川沖に形成された(昨年の出漁日数は14日、漁獲量は389トン)。漁獲されたサクラエビは、平均体長31.1mmの当歳エビ(昨年は31.5mm)と平均体長42.0mmの1歳エビ(昨年は41.3mm)の2群で構成されたが、例年とは異なり、10月、11月は1歳エビが主体となって漁獲された。

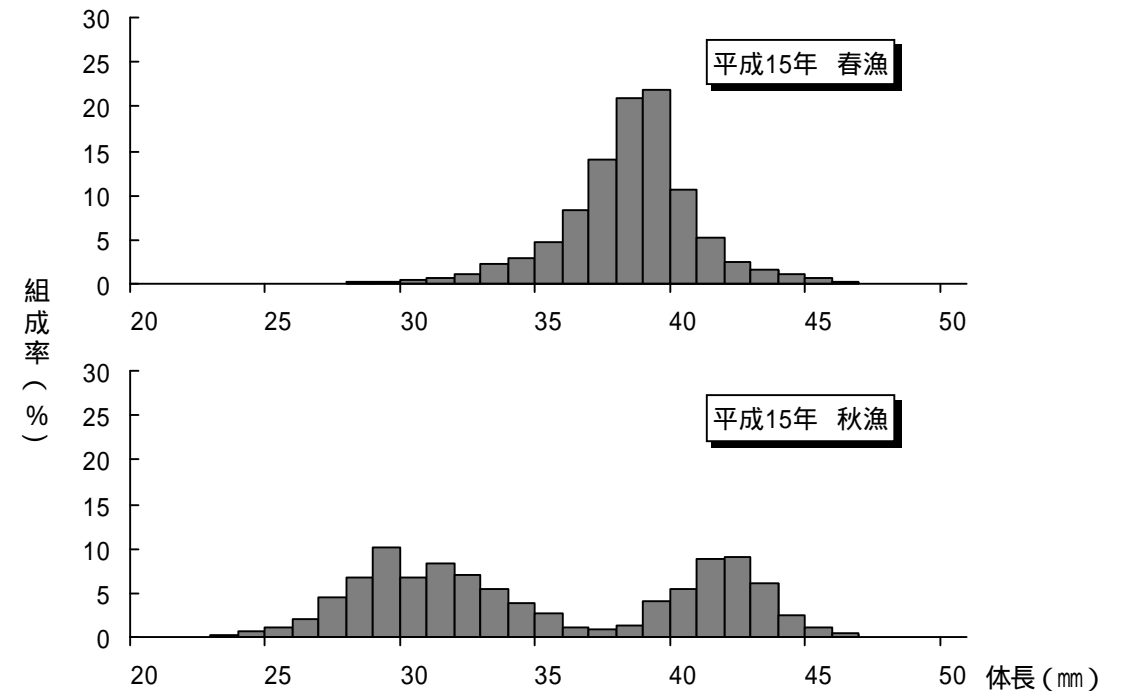


図9 平成15年春・秋漁のサクラエビ体長組成